「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた取組の充実について

―「北谷町スマイルプログラム」を活用した支持的風土のある学年・学級づくりを通して―

沖縄県中頭郡教頭会　北谷町立北谷小学校　　井　口　郁　男

1　主題設定の理由

「小学校学習指導要領」の第１章総則において、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開し、児童に生きる力を育むことと示されている。そのためには、子どもたちが互いの違いやよさを認め合い、心のつながりを感じることのできる学年・学級づくりに取り組むことが重要である。

北谷町立学校は平成27年度から人間関係プログラム「スマイルプログラム」（以降「スマイル」）の実践に取り組んでいる。学級内の良好な人間関係づくりが授業改善に不可欠であるとの観点から、教頭として「スマイル」の積極的な活用を推進していくことが、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けての基盤になると考え、本研究主題を設定した。

2　研究のねらい

北谷町立小学校の「スマイル」の実施状況や諸調査等の結果から、「スマイル」が良好な人間関係づくりや学年・学級の支持的風土の醸成につながるだけでなく、「主体的・対話的で深い学び」を視点とした授業改善に資するものになっているのかを検証する。

3　研究の経過

(1)　北谷町立小学校の「スマイル」実施状況調査の分析
(2)　「スマイル」実施後の支持的風土のある学年・学級づくりについての分析
(3)　「スマイル」実施後の各教科・領域の授業の変化についての考察
(4)　「主体的・対話的で深い学び」実現に向けた「スマイル」の有効性の検証
(5)　研究の成果と課題及び対応策の考察

4　研究の概要

(1)　研究仮説

教頭として「スマイル」の活用を積極的に推進することにより、児童同士や児童と教師の良好な人間関係が構築され、支持的風土のある学年・学級づくりがなされることで、学習指導要領の趣旨に沿った「主体的・対話的で深い学び」を視点とした授業が実現できるであろう。

(2)　「スマイル」とは

ソーシャルスキルトレーニングを大きな目標とした人間関係の構築に取り組むためのプログラムで、教育課程に年間６時間程度位置付けている。

(3)　「スマイル」のねらい

「スマイル」を通して、児童・生徒が主体的に参加する授業づくりを推進し、「子ども同士が学び合い支え合う」協同的な学びのスタイルを確立する。

(4)　教頭の関わり

①　担当者との連携

町の方針を基に、教頭と「スマイル」担当が連携し、年度初めに趣旨説明や実施の呼びかけを行い、年度末には実施状況の取りまとめや教育課程への位置付けを行っている。

②　授業づくりへの助言

教師と児童、児童同士のよりよい人間関係づくりの視点を踏まえた、単元または１単位時間の授業を構成するよう、適宜助言を行っている。

(5)　実施後の支持的風土のある学年・学級づくりについて

①　「Ｑ－Ｕ」調査結果

北谷町では、平成23年度から小３から中３の全児童生徒を対象に、年２回実施している。

「スマイル」導入前の平成26年度の１

回目は、「学級生活満足群」（以降「満足群」）が44.3%、「学級生活不満足群」と「要支援群」の合計（以降「不満足群」）が19.8%だった。

導入後、回によってそれぞれ増減はあったものの、「満足群」は増加傾向、「不満足群」は減少傾向で推移し、平成29年度の２回目には「満足群」が54.8%まで増加し、「不満足群」は、16.3%まで減少した。

平成30年度から令和元年度にかけて、「満足群」が減少傾向、「不満足群」が増加傾向に転じたが、令和２年度の２回目は、「満足群」が57.5%まで増加し、「不満足群」が15.1%まで減少している。

また、「スマイル」を実施した全ての年度で、２回目の「満足群」が１回目のそれと比べ増加している。

② 令和２年度県児童質問紙調査結果

沖縄県内の小学４～６年生を対象に実施した質問紙調査において、「いじめは、どんな理由があってもいけない」と考える児童の割合が全学年で県平均を上回っている。また、「人が困っているとき進んで助ける」との問いには、学年が上がるにつれ肯定的な回答の割合が増え、５年生以上は県平均を上回っている。

(6) 実施後の授業の変化について

① 令和２年度県児童質問紙調査結果

前述の質問紙調査の「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができている」「学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めている」との問いに対する回答では、学年が上がるにつれ肯定的な回答の割合が増える傾向にあり、６年生は県平均を上回っている。

② 教員の感想

令和元年度の「スマイル」授業研究会後に、授業者や参観者を対象に実践事例や感想を調査したところ、主に次のような回答が寄せられた。

・授業において、児童が少しずつ心を開き、自分の気持ちを伝えることができるようになった。
・「本当はこう言いたいのでは」など、心の通訳をする児童が増えた。
・人とどう関わり協力していくか、それを考える姿勢や心構えを「スマイル」を通して教えていきたい。
・全ての授業で「認め合い協力し合う」ことを意識するようになった。

(7) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた「スマイル」の有効性

諸調査結果等から、児童の人間関係の変容や授業及び教員の意識の変化を検証すると、「スマイル」が、良好な人間関係づくりや学年・学級の支持的風土の醸成につながったと言える。

また、児童のお互いのよさを認め合う雰囲気が、授業における話し合い活動の充実に結び付いていると言える。

よって、「スマイル」は「主体的・対話的で深い学び」を視点とした授業の実現に向けた、有効性の高い取組であることが分かった。

5 研究の成果や課題等

(1) 「スマイル」の継続について

「スマイル」が学級経営力や授業力を高めるなど、教員のスキルアップにつながる有効性の高い取組であることが検証できた。よって、さらなる授業改善に向け、教頭として今後も推進し、継続していくことが望ましい。

(2) 教育委員会等との連携について

新任教員への「スマイル」の趣旨の周知や取組の徹底が不十分なので、町教育委員会や担当教諭等と連携して年度当初に必ず研修を実施し、「スマイル」の趣旨を全教員に理解させる。

(3) 教頭及び教頭会の関わりについて

① 「スマイル」の有効性について教員間で実感に差がある。管理職が折に触れ「スマイル」の有効性及び継続することや人間関係づくりの視点を踏まえた授業づくりの大切さを伝え、取り組みの差の解消に努める。

② 教頭会として、毎年「Q－U」等諸調査の結果を分析し、「スマイル」がより効果的な取組になるよう、手立てを講じていく。